

106 大腸癌における手術前後の血中CEA値の変動と予後

鶴海良彦^{*}, 朔 元則^{**}, 梶原哲郎^{*}, 本田 浩^{*}
(国立福岡中央 放^{*}, 外^{***})

本研究は大腸癌の手術前後の血中CEA値の変動が予後にどのような影響を与えるかを検討したものである。

方法：本院にて昭和55年1月より昭和59年12月までに大腸癌の手術をうけた患者のうち手術前、後の血中CEA値を有する症例111例について血中CEA値の変動と手術所見、予後とを比較検討した。手術前後の血中CEA値の変動様式は次の3型に分類した。

I型：術前 正常	術後 正常	48例
II型：術前 異常	術後 異常	35例
III型：術前 異常	術後 異常	28例
a :	術後 異常・減少	21例
b :	術後 異常・増加	7例

結果：①手術前後の血中CEA値の変動：94%は術後血中CEA値が好転。②Dukes分類：I型の半数はA, III型はC, Dに多い。③P, N, S因子：I型の半数はN因子陰性、III型はN因子陽性70%を占める。P, S因子は変動様式と関係ない。④Curability：I型は96%がCurative症例、III型は75%と低い。⑤生存期間：調査中。

108 新しいTIBC・UIBCの測定法

川崎芳正, 堀野嘉宏, 宮本佳一 (JMC)

我々は、これまでにTIBC及びUIBCについて基礎的研究を行なってきたが、今回この系における諸問題点を解決するTIBC・UIBC測定法を開発し検討してきたので報告する。

共沈法を用いた新しい測定法は前処理なしの迅速で簡単な方法であり、室温で25分間のみという短い測定時間で事足りる。更に検体量は7.5μlと、僅かで済む。

新測定法の最低検出感度は約1.5μg/dl。測定系内誤差は2.8-4.9%で特に高値域においての安定性は勝れている。又、我々の測定法により得られたTIBC値と、現在使われているTIBC値との相関は、相関係数r=0.948(n=52)であった。

107 各種癌関連物質のRIA測定による癌の診断

黒田 彰、稻葉妙子、矢田部タミ、山田英夫
東京都養育院附属病院核医学放射線部

癌マーカー測定法の進歩は著しく、最近では原発性肝癌に対するAFPのほかにも、へん平上皮癌、小細胞癌、すい臓癌、胆嚢癌などの腫瘍の種類により感度の高い測定法が開発されている。これらの測定法を組み合わせることにより癌検出能の向上が得られるか否か、また癌の組織学的性状を推定し得るか否かを検討した。

都養育院核放部に検査を依頼された血清について、AFP、CEA、CA 19-9、SCC、NSE、エラスターーゼ-Iのキットを用いて測定を行なった。

現在まで各種の疾患を含む86検体について測定を行なった。いずれかの測定において陽性を呈したものは60検体(73%)であった。このうち2種類の検査で陽性を呈したものは18検体、3種類の検査陽性のものは8検体、4種類の検査で陽性を呈したものは1検体であった。これらについて臨床診断、及び病理診断との対比を行なった。

109 末梢血単核球のIL-2産生能測定法とその臨床応用

新井圭輔、小西淳二、御前 隆、鳥塚莞爾
(京大 放核)、根住直史(関電 内)

IL-2活性の測定には、マウスのキラーT細胞株(CTLL)を標的細胞とし、³H-thymidineの取り込みを指標として、DNA合成の促進をみるin vitro bioassayが広く用いられている。我々は、標的細胞としてCTLLの代りに、京大ウィルス研の難波らによりATL患者末梢血単核球より得られたIL-2依存性T細胞株(UW-4)を用い、recombinant IL-2を標準品とするアッセイを開発した。標準品の倍数希釈列により得られる³H-thymidineの取り込み曲線を標準曲線とし、試料のそれによる曲線との比較により、IL-2活性を定量した。

マイクログン刺激による末梢血単核球のIL-2産生能の測定には、単核球分画をFCSを含まないRPMI 1640に浮遊させ($1 \times 10^6 / ml$)、1μg/mlのPHA-Pを加え、37°Cにて48時間培養した後の培養上清を試料として用いた。

アッセイの再現性は良好で、健常者15例のIL-2活性は、 $2^{-2.5} \sim 2^1 ng/ml$ に分布した。各種悪性腫瘍患者、放射線治療患者のIL-2活性についての検討成績を述べる。